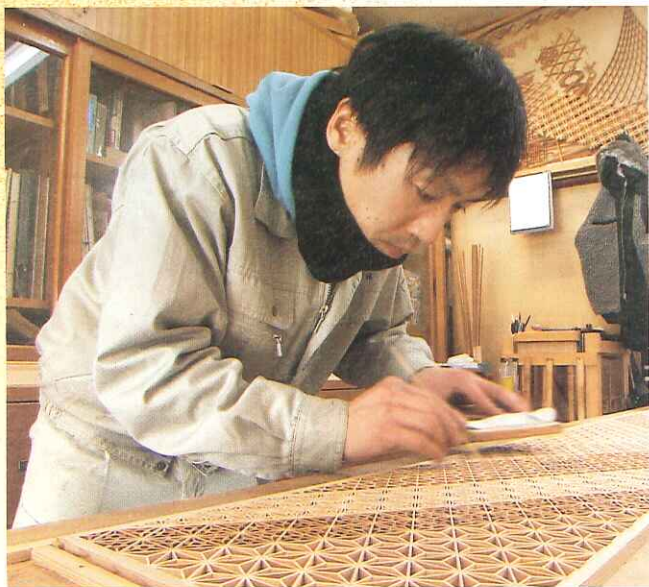


日本の伝統・文化を継承する若者たち

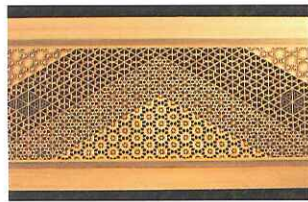
明日への扉

Door to Tomorrow



Keisuke Matsubayashi

組子細工職人。1980年長野県生まれ。重要文化財の修繕などを行い、国より黄綬褒章も受けた名工の横田栄一氏に弟子入り。現在も横田氏が営む栄建具工芸で研鑽の日々を送る。



組子細工(くみこざい)

鎌倉時代より伝わりとされる優れた技法で、障子や欄間の他、衝立などの建具の装飾に使われる。障子の棧を「組子」と呼ぶことから、この名前が付けられた。

組子細工の部品「葉」



組子細工職人

松林 啓介 氏

一幅の絵を描くように、木を相手に精緻を極める。

なぜこの道に？

昔ながらの日本の家に欠かせない、障子や欄間。そこに施される装飾を「組子細工」と呼ぶ。細い木片でさまざまな文様を形づくり、絵のような風景を浮かび上がらせる匠の技だ。長野県長野市。武田信玄と上杉謙信が相まみえた川中島古戦場にほど近い地に、伝統の手業を未来に残そうと励む若者がいる。組子細工の第一人者である横田栄一氏の下で修業を積む、松林啓介さんだ。

松林「最初からこの道を目指していたわけではないんです。体調を崩して高校を中退。20歳までアルバイトを続けていました。でも、このままではいけないと思って父に相談し、入門することができました」

父の節男さんは横田氏の一番弟子で、松林さんは十番目の弟子。二人は親子であり、兄弟弟子同士でもある。工房では、幅一間(約180cm)の欄間をつくる作業が続いていた。大まかなスケッチだけを頼りに、一定間隔の溝を削った杉材を緻密に組み合わせ、正三角形が連続した骨組みをつくる。これだけでも一仕事だが、作業はさらに細かになる。数百個にもなる正三角形の棧に、「葉」と呼ばれる部品を組み文様を構成していく。棧に合わせ、角度をきっちり60度に削りながら作業は進むが、相手はもちろん自然素材、伸び縮みなども考慮しながら一つ一つコンマ数ミリの調整を行う。麻の葉、桜、亀甲など多彩な種類の葉を使い、気が遠くなるような作業を経た結果、欄間に美しい表情が現れる。その出来栄は、師匠を納得させるほど見事なものだった。不断の努力により着実に腕を上げ

ている松林さんだが、兄弟弟子である父のことをどう見ているのだろうか。父はどんな存在？

松林「正確さも、美しさも、スピードも、全てにおいてかなわないですね。同じような仕事をしていても、同じようにはできないですから。まだ、背中すら見えない存在です」

新しい一步を踏み出しかねていた若者は、目の前にあった真剣に打ち込める仕事を見つけ、そして今、父の背中を追い続ける。その道は険しいが、明日への扉を開け、また一步、夢に近づく。

※2013年2月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!
さまざまな壁を乗り越え、伝統の継承に取り組む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE
WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットで
ご覧になれます。

アットホーム明日への扉 検索

TV番組

ディスカバリーチャンネル(CS)

冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!

最新号のご案内 好評公開中

No.050 / 八女石灯籠職人 橋山 裕司 氏